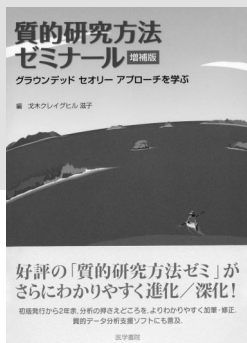




戈木流 GTA を認識論から読み解く

質的研究方法ゼミナール 増補版 グラウンデッド セオリー アプローチを学ぶ



戈木クレイグヒル 滋子 編
A5 判・220 ページ
定価 2730 円(本体 2600 円+税 5%)
ISBN 978-4-260-00700-9
医学書院, 2008

評者

西條剛央
日本学術振興会特別研究員

質的研究に対する代表的な批判として「主観的」というものがあげられるが、本書は「客観的」な質的研究を目指す非常に野心的な内容である。

GTA のさまざまな流派

日本で広まりつつあるグラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下

GTA とする)は、いくつかの流派に分けられる。グレーザーとストラウスの共著による「オリジナルの GTA」¹⁾。その後分岐したグレーザー派とストラウス派の GTA を独自の観点から融合し、編み変えた「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」(M-GTA)²⁾。そしてそれを SCQRM(構造構成的質的研究法)をハードとす

ることで事例研究への適用も可能とした「構造構成的 M-GTA」³⁾。ストラウスとコービンの「伝統的な GTA」⁴⁾。それを継承発展させた「戈木流 GTA」。言うまでもなく、最後に挙げたものが本書に示されている「GTA」である。そして本書は戈木氏が実際にこなっているゼミナールをベースにしていることもあり、そのわかりやすさにおいては群を抜くものになっているといえよう。

戈木流 GTA の認識論(世界観)とは?

戈木流 GTA の特徴を理解するために、まず本書の冒頭で示されている次の箇所に注目してみよう。

「私がこのゼミで、プロパティ property とディメンション dimension を中心に据えて GTA を教えている方法も、ストラウス先生の教育方法とはかなり異なっています。ですから、この本で示した GTA は、私のとらえ方に基づいたものにすぎないということをご了承いただきたいと思います」

このように方法の限定性を予め明示しておくことは、学習者が混乱をきたすことなく学べるという意味でも非常に重要なことであり、こうした言及から研究者(方法論者)としての戈木氏の真摯なスタンスが理解できよう。

そこでここでは、氏の言う「私のとらえ方」とはどういうことを意味しているのかについて一歩踏み込んで考えてみたいと思う。というのも、どのような世界観、言語観を前提としているかによってどのような方法が妥当であるかといった研究観も変わってくるため、戈木流 GTA の世界観を理解することができれば本書の内容をより一層すっきりと理解できると考えることができるからだ。

伝統的な GTA はテキストをバラバラにする切片化という作業を基本とするが、本書では切片化する理由について次のように述べられている。

「データの切片化の目的は、データがある大きさに区切り、データ全体に流れる文脈から切り離すことです。それによって、切片となったデータを文脈に流されることなく客観的に細かく見ることができます」

「初めからテーマや視点をもってデータに臨むと、データ本来の内容がみえにくくなり、どうしても主観的な分析になってしまいます。切片化という仕掛けによって文脈から自由になることで、自

分のバイアスと、前後の文脈にも左右されず、データ本来の意味を客観的に理解することができやすくなるのです」

ここから、できるだけ主観を排して、文脈から切り離して客観的に細かく見ることで、データ本来の内容や意味を客観的に理解できるという考えに基づいていることがわかる。データ、言葉、意味、情報といったコトをモノ的に捉えている、ということもでき、こうした世界観は通常「客観主義」と呼ばれるものに近い。

「客観的」研究と相性のいい枠組み

こうした視点からみれば、なぜ切片化を重視するのかもよくわかるし、本書の最大の特徴ともいえる「プロパティ property とディメンション dimension を中心に据えて GTA を教えている」理由もよく理解できるようになると思われる。プロパティとディメンションは、言ってみれば、データを可能な限り誰が分析しても同じようになるよう「客観的に」分析するための方法であり、それゆえこの方法は客観主義という世界観を前提としたときに最も相性のよいものになる。したがって、「客観的な」研究が求められる場合に有効な枠組みになることが理解されよう(逆にいえば主観を活かした研究を行なう際には向かないかもしれないが、もち

ろんそれはどちらが絶対に正しいというものではない)。また、これにはかなりの時間はかかるものの、初学者でも丁寧に分析を重ねることで、ある程度の段階まではベテランの人と同じように分析することができるのも魅力の一つといえる。

本書の認識論的、方法論的特性を踏まえた上で、自らの研究関心や目的に応じて活用していくことによって、「戈木流 GTA」は未開の領野を力強く切り拓くより使いやすいツールになるだろう。

こうした書評も、私が構造構成主義という観点(認識論)から本書を捉えた一つの側面に過ぎないが、本書の研究観を理解する手がかりにいただければ評者としては幸いである。📖

文献

- 1) グレイザー, B. G. & ストラウス, A. L. 著 後藤隆・大出春江・水野節夫 訳: データ対話型理論の発見——調査からいかに理論をうみだすか, 新曜社, 1996
- 2) 木下康仁 著: グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い, 弘文堂, 2003
- 3) 西條剛央 著: ライブ講義・質的研究とは何か SCQRM ベーシック編/アドバンス編, 新曜社, 2007/2008
- 4) ストラウス, A. & コービン, J. 著 操華子・森岡崇 訳: 質的研究の基礎——グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順 第2版, 医学書院, 2004